2019 年 12 月 21 日
2019 年度第 2 回共同課題研究会

「社会性の起原—ホミニゼーションをめぐって」

2019 年度第 2 回共同研究課題研究会報告

１．著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

２．研究会基本情報

日時：　2019 年 12 月 21 日（土）　13:00～18:30
場所：　AA 研マルチメディア会議室（3 階 304 室）
報告者：
　１）西江仁徳（AA 研共同研究員・京都大学）
　　チンパンジーは死なず、ただ消え去るのみ　チンパンジー死生学再考
　２）田中雅一（AA 研共同研究員・国際ファッション専門職大学）
　　モンキーはどこまでキンキーか？　人間のセクシュアリティとジェンダーの起原についての試論/私論

３．内容（要旨および質疑応答・議論）

3-１）　チンパンジーは死なず、ただ消え去るのみ　チンパンジー死生学再考（西江仁徳）

要旨：

日常的に離合集散する性質をもつチンパンジー社会においては、「ふだんの離合集散」をたんに引き延ばすことで、集団からの離脱や長期単独生活が起こりうることを、これまでの『制度』や『他者』、『極限』において論じてきた。本発表ではさらに「個体の死」を離合集散の延長線上に位置づけることで、チンパンジー社会における死の問題を検討する。

一般に、野生チンパンジー集団において、個体の死亡が観察されることは非常にまれである。ほとんどの場合、死体が発見されることはなく、長期にわたって観察されなくなった個体がいた場合、それが移出によると考えられなければ、「推定死亡」として集団の在籍個体リストから外されることになる。これは人間の観察者にとってだけでなく、日常的に離合集散するため集団のメンバーとつねに一緒にいるわけではないチンパンジーたちにとっても、おそらく同様だと思われる。しばらく会っていない個体がいまも生きているかどうかは、再会して生きていることが確認されない限りはっきりしない。チンパンジー社会における死の問題をあつかうには、こうした日常的な離合集散による「出会わなさ」と、個体の死による「不在の積み重ね」の関係を、あらためて検討する必要があるだろう。

2019 年 12 月 21 日
2019 年度第 2 回共同課題研究会

死は自分で経験することが決してできないという意味で、完全に経験を超えた「端的な超越性」である。それゆえ経験可能な死はつねに他者の死であるが、しかしまた「他者の死がいかなる意味で経験可能なのか」という内実はじゅうぶんに明らかなわけではない。ともあれ、自らの死が経験できない以上、死があるとすればそれは他者の死であり、そこに「社会」のあらわれを見ることは可能かもしれない。

また、死は予測や制御できないものであり、またすべての生き物は死ぬという命題を受け入れるのであれば、回避不可能なものでもある。つまり、死はいつおとずれるのかわからないという偶然性をまといつつも、決して避けることはできないという必然性もともなっているという意味で、究極の他者とも言えるかもしれない。われわれには避けることもできずコントロールもできない相手として、死＝他者と向き合うことが強いられている。ここには、「究極の他者としての死」への向き合い方として、「社会」の原初的な姿があらわれるかもしれない。

こうした目論見にもとづきつつ、チンパンジーの社会と死の問題を考えたい。議論をすすめる上での作業仮説として、「死への向き合い方には人間と動物（チンパンジー）との間には大きなギャップがある」と仮定し、（1）人間は死を概念的に把握できる一方で、「剥き出しの死」を隠蔽するさまざまな文化的装置をもつ、（2）動物は死を概念的に把握しないが、「死を剥き出しにしたまま」生きている、（3）こうした人間と動物の死への向き合い方の違いは、「社会性」の違いに反映されている（人間は「死が存在する社会」に、動物は「死が存在しない社会」に生きている→「人間は（社会的に）死ぬ」が「動物は死なず、ただ消え去る」）という、3 つの下位仮説について検討した。

まず、人間は死を理解している点で動物とは決定的に異なる、という命題を前提とした社会心理学の理論として、存在管理脅威理論（Terror Management Theory: TMT）の議論を検討した。TMT は、文化人類学者の E. Becker の *The Denial of Death* の議論を礎に、人間は死の不安（存在論的恐怖：existential terror）から自己を防衛するように動機づけられており、存在論的恐怖に対する心的な防衛メカニズムが人間の社会性に関わる心理的なメカニズムの基礎になっているという理論枠組みである。存在論的恐怖とは、命の危険に直面している恐怖ではなく、自分の死が不可避でありまたそれが予測不可能であることによる「実存的な不安」のことである。このような死の認識をもつには、自己意識や将来についての予測能力、論理的思考能力（「生き物はみな死ぬ」＋「自分も生き物である」⇒「自分も（必ず・いつかは）死ぬ」）が必要であり、これらの認知能力を兼ね備えているのは人間だけであるとしている。

TMT によれば、人間は存在論的恐怖への対処として、自尊感情を高めたり文化的価値観を擁護したりすることによって、文化的不安緩衝装置の働きを強めようとすると考えられている。こうした対処の一環として、内集団バイアスや外集団排斥をすることによって自らの集団への帰属性を高めたり、規範を遵守し逸脱を否定的に捉えるなど集団内の秩序を守ろうとしたりすることが確かめられている。また、存在論的恐怖が高まると、動物性を忌避

したり、人間の動物性の象徴でもある身体性への否定的反応が生じたりするなど、人間と動物との区別を強調する反応があることも知られている。

TMT の理論的前提として、動物には存在論的恐怖はないため、本発表の作業仮説と整合的な議論であると言える。また、後述するように動物死生学の議論においても、死の不可避性の認識が動物にあることはわかっておらず、この点においては動物死生学の主張とも部分的には整合的である。しかし、この TMT が前提とする人間と動物との本質的な区別（人間は死を認識している／動物は死を認識していない）は、それ自体が存在論的恐怖に対する象徴的防衛（動物性の否定）の一部ではないのか、という疑いは残る。また、人間は死の概念を把握していると言われるが、この点についてもほんとうにそう言えるのか、死の概念を把握する、ということの内実は意外にあいまいなことも指摘できる。さらに、存在論的恐怖がヒューマンユニバーサルなのかどうか、また TMT の主張が正しいとしても、動物にはそなわっていなかった死の概念を、人間がいかにして獲得したのか、という進化プロセスに関する議論も検討する必要があるだろう。

TMT とは反対に、動物にも少なくとも部分的には死の認識があるという主張が、動物死生学（animal thanatology: AT）からなされてきている。AT の主張の根本には、死体に対する適切な対応は、病気の感染防止や捕食者回避の側面から適応的であるという前提がある。じっさいに、社会性昆虫やカラス、イルカ、ゾウ、霊長類などさまざまな動物の系統で、死体に対する速やかな反応がみられるという報告がある。とくに、カラスやゾウ、霊長類、クジラ類にみられる死体に対する共通した反応は、複雑な社会性を背景に進化した知覚・認知処理能力にもとづくものと考えられており、死の概念の 4 要素（不可避性、不可逆性、機能停止、因果性）のうち、ヒト以外の霊長類にも死の不可逆性と機能停止は理解している可能性も指摘されている。これは、人間の 10 歳児の死の認識と同レベルとされており、少なくとも萌芽的には動物にも死の認識があると論じられている。ただし、死の不可避性や因果性については AT でもはっきりした証拠がなくわからないとしており、この点においては、動物には死の不可避性にもとづく存在論的恐怖がないとする TMT の主張と齟齬があるわけではない。

これまで報告されているチンパンジーの死に関する記録をおおざっぱに類型化してみると、(A)死体への毛づくろいや（乳児の場合）運搬など、生前にしていたのと似た行動を継続する、(B)死体をゆする、近くに長時間とどまるなど、生前とは異なる反応をする、(C)うつ状態（例：食べなくなるなど）など、心理的なダメージを受けている様子をみせる、(D)殺し（集団内／間、オトナ同士、子殺し）、の 4 つに分類できるが、いずれについても死に関する認識を前提としなくても、より節約的な説明も可能なようにも思われる（例：殺しの場合は「殺意」が前提となるが、殺意のない「傷害致死」である疑いが残る）。

こうした報告を検討すると、AT の「動物は死を（少なくとも部分的には）理解している」という主張の妥当性には留保をつけざるをえない。まず、死はそれ自体が概念的に把握されるしかない（経験的には把握できない）ものであるが、そもそも「概念の把握」について行

動の観察のみから知ることができるのか、という問題がある。また、AT のように動物の死を人間の死にひきつけて解釈しようとする試みは、それ自体が存在論的恐怖に対する象徴的防衛（動物性の否定）ではないのか、つまり、「動物は死を認識することなくたんに死ぬ（剥き出しの死）」という可能性を、「動物にも死の理解がある」という主張は隠蔽しようとしている疑いがある。また、殺しについても、傷害致死である可能性を棄却できるほどの強い証拠はない（例えば、動物は死の因果性を理解しているという証拠がないことは AT も認めている）ため、それを「殺し」と呼ぶことは擬人的な意図帰属の疑いが残る。さらにいえば、AT が依拠している動物の死に対する反応の報告は「反応があったもの」に偏っており、「死体に対してとくに明確な反応をしなかった」ようなネガティブデータは報告・出版されにくいことを考えると、死体に対する反応があった事例から結論を引き出すことはより慎重になる必要もあると思われる。

いずれにせよ、「動物が人間のようには死なない」可能性、つまり、人間の社会的に意味づけられた死ではなく、動物が「たんに死ぬ」ことをどのようにして「動物の社会」の問題と関連づけられるのかは、今後の検討課題である。また、作業仮説が支持されたとしても、人間がなぜ・どのようにして死の概念を獲得したのか、という問題は、人間の社会のあり方を規定する大きな問題の一つとして、進化の枠組みにおいて検討する必要があるだろう。

質疑応答と主な議論：

＜動物における死/死体とのかかわり＞

●他者の死/死体に遭遇する経験

- 死者の存在/死んだ人（他者の死）が生まれることで、他者の死から自己の死への転換、自己の死が作り上げられる
- 人間の場合、葬儀等、経験の繰り返しによって死が意識されるが、動物は死/死体と会うことが少ない

●死体への反応

- 動物は、いなくなった個体のイメージ/記憶と、死体を関連付けられるのか
- 死体を運搬することについて異なる視点（死を理解できる/できない）で解釈される
- 擬人化が許される動物の死の議論
- 同種の死体は（病気の媒介）危険な存在となりうる
- 営巣性哺乳類における、死体への反応は事例があるのか

＜離合集散性にかかわる問題＞

- 離合集散社会では、数日一緒にいない個体を生きていると考えているのか
- いない個体については、生きているか死んでいるか考えないし気にもしないのでは
- 凝集性の違いが、誰かの在/不在の顕在化の違いにつながる

- 存在/非存在と生/死の認識が一致しない
- 死/死体/不在の概念の整理が必要である
- 不在の延長としての死、という議論は可能か？
- 離合集散するチンパンジーと凝集性の高い霊長類での比較は可能か？

＜動物学的に死を扱うことについて＞
- 福祉の視点から死への注目が集まっている
- 文化人類学的には面白いが、動物学的な意義を検討する必要がある

＜生活の拠点の有無による死への対処の違い＞
●生活の拠点としての家がある社会とない社会
- 帰ってくる場所がある場合、死体への対処が必要
- 集団の中で死ぬことで生じる弔い
- 集団において行かれる（ついていけない）ことが死につながり、他者の死を体験できない

●集団の中で死ねる社会
- 他者への信頼や協力行動との関連があるのではないか
- ケアとの関連や、相互行為の進化としてもとらえられる

＜存在論的恐怖の対象としての死＞
●一つではない死の意識と恐怖
- 一つではない死の概念：避けるべき死と、積極的な死（間引き、姥捨て等）
- 自己の“避けられない死”に対する恐怖
- 死と向き合う（よく考える）ことで恐怖が薄れることがある

●死をめぐる存在論的恐怖の普遍性
- 死について文化的な多様性があるのは間違いないだろうが、その根幹に、死への普遍的な不安/恐怖がある、と言えるのか
- 現象としての死は人間みな理解可能だが、そこに根源的な不安があるというのは哲学的な問題ではないか
- “死”への恐怖（terror）は、チンパンジーにはない（萌芽的にはあるかもしれない）、とされるが、“危険”への恐怖は存在するだろう

＜死をとりまく相互行為＞
●死者に対する行動（相互行為）から、その種の社会性がわかる

- 要素（死/生）から考えるか、関係（ある/ない）から考えるか
- 双方向的な行為が成立しなくなったときの反応に社会性が表れる
- 反応がないので、行為に対する解釈の余地が増え、議論が困難なのではないか

3-2） モンキーはどこまでキンキーか？ 人間のセクシュアリティとジェンダーの起原についての試論/私論（田中雅一）

要旨：

1. はじめに

本発表の問題意識は、人間のセクシュアリティの起源をめぐる議論を整理することである。本発表では、前半では人間のセクシュアリティについて、その生物学的な特性と影響について考察し、後半では南アジアの事例に基づいて「強制結婚」の可能性を考察する。

以下の特徴は、人間に限らないが、人間のセクシュアリティを考える上で重要な要素である。1. 性交が必ずしも生殖に結びついていない（非生殖的性交：生殖からの自由）。その典型は、 初潮前や妊娠時、閉経後においても性交がなされるということである。あるいはオーラルセックスやアナルセックスといった行為を考えてもいいだろう。これらは、性交が生殖だけでなく快楽を一部とするコミュニケーション活動の一部となっているということを表す。2. 非性交的性行為がしばしば認められる。それは、性器を中心とする快楽からの自由を意味する。典型は、フェティシズムのようなモノへの性的執着である。

2. 発情の隠蔽をめぐって　二つのセクシュアリティ

人間の女性の性的行為の主たる特徴は、以下の 4 つである。1.月経周期や排卵とは無関係な性行為が認められる。2.性交が集中する時期があるが、排卵とは関係ない。3. 排卵期には、男性の匂いなどに敏感になって、性的に興奮しやすくなる。4. 排卵期に女性が他の男性にも性的関心を示し、パートナーとの性交(in-pair copulation)以外にも、extra-pair copulations が増える。特に注目したいのは、排卵期に女性は男性的な容貌（女性と共通性のない容貌）の男性に惹かれる。

発情の消滅・隠蔽と排卵の隠蔽の理由について諸説あるが、人間の場合、男性が女性とその子どもを恒常的な形で保護するという形（ペア・ボンド）という。そして、この関係を維持する手段として、恒常的な性関係が重要な役割を果たしたと考えられてきた。しかし、ここで男性に求められているのは女性と子どもの保護や食料の獲得など物質的な支援であって、優良な遺伝子とは言えない。このため、排卵期にはペア・ボンドの相手以外の男性とも積極的に交わることで強い遺伝子を獲得し、優良な子孫を残そうとしている。

3. 転換　強制結婚の出現

さて以上の議論では、女性は、恒常的にセックスをし、その見返りに物質的援助を受ける

男性と、排卵時に強い遺伝子を求めて関係を持つ複数の「男性的な男性」という二種類の男性を操る存在として、描写されている。しかしながら、少なくとも今日、状況は大きく異なる。結婚について言えば、嫡出子を保証するために男性が女性のセクシュアリティを管理するという「家父長的」状況が生まれている。そこでの理想は、女性が性に目覚める前、すなわち初潮前に結婚させることである。さらに、女性は生殖のための女性と快楽を与える女性の二つに分類されることになる。男性ではなく女性が二種類に分けられているのである。男性の分類から女性の分類へという転換は、家父長制の起源を問うことに結びつくであろう。ただし、本発表では、歴史的な問いを避けて、家父長的な初潮前の「強制結婚」が認められる社会に認められる非人間との結婚を取り上げることで、女性のセクシュアリティの可能性について論じる。

4. 非人間との「強制結婚」

1)中部インドでは矢や樹木との結婚が、インドの人類学者、S. C. Dube によって報告されている。こうした結婚が実施される理由は、娘を初潮前に結婚させるべきであるという社会規範への対応だという。実際、結婚前に初潮が始まった女性には、不吉だという社会的スティグマがついて回る。このため、早く「結婚」をさせるのだという。

2)ネパールのネワールたちの間では、3 回の結婚が実施されるが、そのうちの最初の結婚がヴィシュヌ神を表す神木との結婚である。2 番目は、太陽神との結婚で、11 歳か 12 歳になると個別に行われる。男性との結婚は 3 番目で初潮の後に実施される。

3)南西インドでは、不可触民の女性を初潮前に女神と結婚させる風習があり、このような女性をデーヴァダーシー（神の僕）という。多くは、初潮が始まると村の有力者の愛人となるが、その後ムンバイなどの大都市で売春婦となる。ただし、少数は村に留まり、宗教的な役割を担うことになる。どの場合も性交は許されているが、人間との結婚は禁じられている。

4)ケーララ州の母系集団ナーヤルの女性たちは、二種類の結婚を行う。まず、高位カーストのナンブーディリとの結婚（talikettukaliyanam）で、次に初潮の後に実施されるナーヤル男性との結婚（sambandham）である。前者の結婚は形式的なものである。その後、夫ならびにそれ以外のナーヤル、あるいはナンブーディリの男性と性関係を持つ。

最初の 3 事例における最初の結婚はすべて非人間との結婚である。4 の結婚相手は高位カーストであって、神に近い存在である。これらの結婚を初潮前に実施することで、その後の結婚や性生活で女性たちは自立を獲得していると言えないだろうか。伝統社会＝家父長社会という図式を今一度、女性のセクシュアリティという視点から再考する必要があろう。

質疑応答と主な議論：

＜女性の性的行動（特に排卵期）に関する議論＞

●人間の女性に関する議論

- 排卵期の性行動をそれ以外の時期と比較して議論することは、社会生物学的な概念と合致するが、解釈に対する批判も生んできた
- 女性が排卵期を認知できるのか否かといった、現代的な性科学の視点とも整合性を検討する必要がある

●霊長類学からの排卵/発情に関する議論
- 排卵の同調は、霊長類にも認められ、食物の利用可能性との関係が議論されてきた
- 進化生物学においては、発情の季節的同調が議論の中心となってきた

＜ペア・ボンドに関する議論＞
●ペア・ボンドの安定性
- 家族と関連付けた議論の中で、ペア・ボンドの存在や安定性が強調されることがある
- 雌雄間での様々な現象をペア・ボンドに関連付ける議論が多い
- 婚外性交をみとめてしまうとペア・ボンドが成立しないのでは？
- 男性が婚外性交を認知していない、あるいは、婚外性交を“分かっていないことにする”社会

●ペア・ボンドに対する反論
- 現代の人間には一夫多妻的な社会も多い
- 配偶交換が行われる社会のように、一時的にはペアが成立するが、永続的ではなく、通時的にみるとペアが変わることがある
- 食料供給者としての男性は、必ずしもペアに限定される必要はない
- 結婚制度が安定した社会を想定としているのではないか

●人とサルのペアの違い
- サルのペアは、すべての時間を一緒に行動する
- 人間のペア・ボンドでは、家を共有することが重要で、家の中と外での行動を異なるものとして捉える必要がある

＜性の違いによる戦術の違い＞
- 人間では食糧を供給する男性が必要という議論があるが、供給者としてペアを想定する必要はない
- 性交を伴わない異性間の協力行動がみられるにもかかわらず、性と食物を関連付ける議論が多い
- 男性（オス）視点での議論だけでなく、女性（メス）視点でのストーリーが考えられるのではないか

- 女性の戦術と男性の戦術の拮抗があるという視点が重要

＜非生物との結婚＞

- 社会的スティグマの影響
- 初潮前に結婚させることで、女性の両親にも社会的スティグマの回避というメリットが生じる